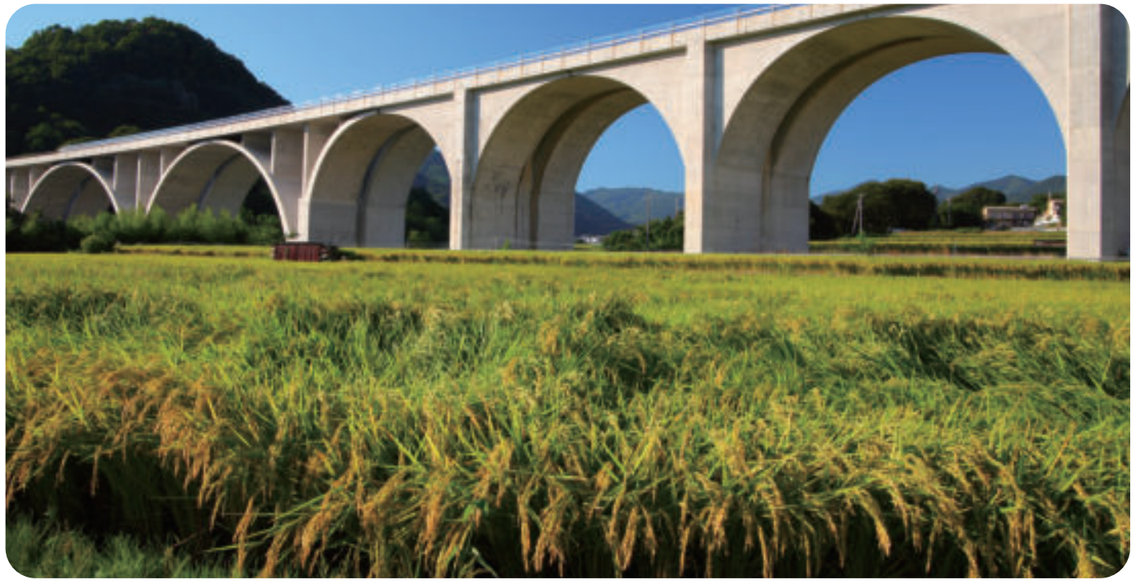
発 刊 日　令和7年10月1日
発 刊 者　長野県神川沿岸土地改良区
監　　修　上田市教育委員会　和根崎 剛
編 集 者　株式会社アドクリエイティブデザイン
デザイン　Per合同会社
イラスト　ヒロタヨシト
印 刷 所　有限会社アイシー製本印刷

ふるさとの清流（せいりゅう）
神川（かんがわ）

長野県神川沿岸土地改良区（ながのけんかんがわえんがんとちかいりょうく）

神川の水があたえてくれる恵み



この本では、上田市の東側を流れる「神川」と、人工の水路「堰 -せぎ-」について勉強するよ！
きっとみんなの学校や、お家の近くにも流れているよ！

目次 -もくじ-

1. 神川とお米作りの歴史 2
2. 神川とは～堰の成り立ちと現状～... 6
3. 神川の水と菅平ダムのおはなし 24
4. 神川流域の課題と、今後の展望 26

知っているようで知らない？ ふるさとの清流「神川」クイズ！

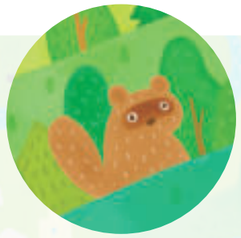
クイズ 1　神川って知ってる？ どこからどこまで流れているかな？

クイズ 2　堰 -せぎ- って全部でいくつぐらいあると思う？

クイズ 3　神川の水ができることってなんだろう？

クイズ 4　菅平ダムってなんのためにあるの？ 必要なの？

クイズ 5　いま、神川の流域で起きている問題って？



この本を読んで
一緒に答えを見つけよう！

1. 神川とお米作りの歴史 その1

大むかしの人のくらし
（米作りがはじまる前）

大むかしの人たちは、田んぼや畑を持たずに、山でどんぐりなどの木の実をとったり、ナウマンゾウなどの動物をつかまえて食べていました。石で作ったナイフやハンマーを使って、狩りや料理をしていたのです。

そのころの人たちは、同じ場所にずっと住まずに、食べ物をさがしてあちこちに移動していました。菅平高原では、当時の石の道具が土の中から見つかっています。

（左）握斧状石器　（右）石刃
（菅平学校敷地遺跡）

縄文時代の人のくらし

15,000年くらい前になると、「縄文土器」というやき物が作られるようになりました。なべのように使って、かたい食べ物をやわらかく煮て食べられるようになったのです。

縄文時代の人たちは、動物や魚をとったり、木の実を拾ったりして生活していました。そして、クリの木などの世話をして、たくさん実がなるようにしていたと考えられ、これが「農業のはじまり」とも言われています。

このころから、同じ場所に家を作って住む「定住」がはじまりました。家は、地面に穴を掘って、木で作った「たて穴住居」というものでした。神川のまわりでは、縄文時代の人のくらしの跡がいろいろな場所で見つかっています。

浅鉢　　石のやじり
（漆戸八千原遺跡）

菅平唐沢岩陰遺跡

神川流域での米作りのはじまり

いまから約2,800年前「弥生時代」になると、上田では千曲川の近くではじめて米作りが行われました。広いしめった土地を田んぼにして、お米を育てたのです。お米の作り方は、いまの愛知県や静岡県あたりから伝わったようです。しかし、神川流域では少し後になってからはじまりました。理由は2つあります。

- **神川周辺には千曲川のような広いしめった土地がなかったこと**
- **神川の水は高い山（菅平高原）から流れてきて、とても冷たかったので、お米がうまく育たなかったこと**

そのため、神川のまわりでは弥生時代の田んぼのあとが見つかっていません。かわりに狩りをするために寝泊りした場所や少しの土器などが見つかっています。

一方、千曲川のそばでは、田んぼで米作りをしたとみられる人たちの大きな村のあとが見つかっています。

古墳時代の米作り

そのあとに続く「古墳時代」になっても、神川周辺では米作りはあまり行われなかったようです。しかし、この時代の終わりごろになると、神科や本原地区に大きな村や古墳（むかしのえらい人のお墓）が作られはじめ、田んぼでの米作りもはじまっていたのではないかと考えられています。

藤沢古墳（本原）

日本の歴史
- 約40,000年前　旧石器時代
- 約15,000年前　縄文時代
- 約2,800年前　弥生時代
- 西暦250　古墳時代
- 592　飛鳥時代
- 710　奈良時代
- 794　平安時代
- 1185　鎌倉時代
- 1336　室町時代
- 〔戦国時代〕
- 1568　安土桃山時代
- 1603　江戸時代
- 1868　明治時代
- 1912　大正時代
- 1926　昭和時代
- 1989　平成時代
- 2019　令和

1. 神川とお米作りの歴史 その2

奈良時代・平安時代に作られた神川の堰

そして「奈良時代」や「平安時代」には、農業の道具や作り方が進化して、たくさんの作物がとれるようになりました。このころ、神川の水を田んぼにひくための「吉田堰」という水路が作られました。

いまも広大な面積を潤す吉田堰

真田昌幸とお米作りの進化

「鎌倉時代」や「室町時代」には、田んぼに水をひいたり、肥料を使ったりする農業の技術がもっと進んで、お米がたくさんとれるようになりました。そのため、お米が「税」として集められるようになり、くらしや社会にとって、とても大切なものになりました。

「戦国時代」になると、真田昌幸が、本原で「検地」をしました。

- **どこにどれだけの田んぼがあるか**
- **どれくらいお米がとれるか**
- **だれがどの田んぼを使っているか**

こうしたことをくわしく調べて、記録に残すことで、年貢米（当時の税金にあたるもの）を正しく集めたり、田んぼをうまく使うしくみを作ったのです。

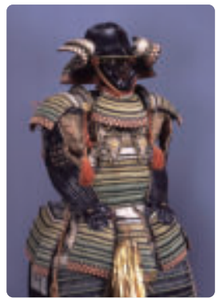
真田昌幸肖像（上田市立博物館所蔵）

松平忠優の業績

「江戸時代」になると、さらに田んぼの管理の仕方や、お米の育て方が進歩して、いろいろな種類のおいしいお米が作られるようになりました。早く育つお米や、病気に強いお米なども生まれ、お米の生産量もふえました。

しかし、天気が悪い日が続いたり、浅間山が噴火したりして、お米ができなくなる年も度々ありました。いまから190年くらい前、当時の上田のお殿さま「松平忠優」は、上田城の蔵にあったお米を配って、困っていた神川のまわりの人たちに分けてあげました。人々を助けた立派なお殿さまとして知られています。

また、農業をさかんにして、村の人たちのくらしをよくしようと努力しました。



松平忠優所有具足（上田市立博物館所蔵）

- **神川流域に用水路や堰を整え、お米作りをしやすくした**
- **水を安定して流すしくみを作ることで、雨が少ない年でも田んぼに水が行き渡るようにした**
- **田んぼや村の様子を記録し、しっかりと管理するしくみをつくった**

このように、松平忠優のはたらきによって、神川のまわりの田んぼはもっと広がり、たくさんのお米がとれるようになりました。

そして「大正時代」になってようやく長地区の大日向でも、米作りができるようになりました。これは、冷たい神川の水を水路にためて、あたためてから田んぼに入れる方法が発明されたからです。

日本の歴史

- 約40,000年前
- 旧石器時代
- 約15,000年前
- 縄文時代
- 約2,800年前
- 弥生時代
- 西暦250
- 古墳時代
- 592 飛鳥時代
- 710 奈良時代
- 794 平安時代
- 1185 鎌倉時代
- 1336 室町時代
- 〔戦国時代〕
- 1568 安土桃山時代
- 1603 江戸時代
- 1868 明治時代
- 1912 大正時代
- 1926 昭和時代
- 1989 平成時代
- 2019 令和

2. 神川とは～堰の成り立ちと現状～

神川ってどんな川？

神川は、四阿山を水源として、菅平高原から千曲川まで流れる全長約21kmの川です。

この神川の水は、作物を育てるための農業用水や、人々のくらしに欠かせない生活用水として利用され、上田市・東御市の人々にとってかけがえのない存在です。

水源となる四阿山と菅平ダム

神川に架かる国道18号、しなの鉄道、神川橋

上田市～東御市を行き来する時に、必ず橋で渡る川だね！

毎年6月1日に行われる開山祭では、四阿山の頂上に登って、水の安全や豊作を願う神事が行われます。このように、神川は地域の人々にとって、とても特別な存在となっています。

地域の農業に欠かせない「堰」のこと

神川から農業に使う水を引いてくることを「かんがい」とよび、その水を流すための人工の水路を「堰 - せぎ -」と呼びます。

川から水を引く場所（取り入れ口）では、川の流れで土がけずれないように、コンクリートでしっかりした「頭首工」というものを作ります。頭首工は川の流れをせき止めて、水を堰に送る役割もあります。

取り入れ口にある「水門」を開けると、水が堰に流れていきます。

頭首工（水をせき止める）

取水口（水を取り入れる）

知ってほしい！
神川沿岸土地改良区のこと

菅平ダムや堰の改修や整備を行って、安定したかんがい用水を田んぼや畑に流して、地域の農業を支えるために作られた農家の組織が「神川沿岸土地改良区」です。

1952年に活動がはじまってから70年以上も経ちました。

「水土里ネット」という愛称でも呼ばれています。

水土里ネット
神　川

神川の流れと堰の位置

神川から引かれた水（かんがい用水）は、上田市や東御市の田んぼや畑に流れていきます。そのおかげで、お米やいろいろな果物、野菜がよく育ちます。この水は、わたしたちの食やくらしにとって欠かすことのできない、とても大切な「恵み」です。

実際にはもっと細かく流れて、広い地域に水を届けています。

神川の堰マップ

水色の流れを選ぶと、詳しい説明が見られます。おうちの人と見てみよう！

神川の堰は右岸 7 つ、左岸に 8 つで全部で 15 もあるよ！
川の上流から見て右側を右岸、左側を左岸と呼ぶよ！

岩門堰

大屋堰

新屋堰

窪・小西堰

神川　堰の始まる場所　代表的な堰の流れ　堰の流れ（一部）

神科の台地　堰への流れ（写真）　上田市の小学校　東御市の小学校

神川の左側にある
「１番大きな水路」のおはなし

神川には15の堰があります。
その中で「左岸幹線水路」は、
とくに大きくて大切な水路です。

この水路は、神川の１番上の方から水を引いて、上田市や東御市の畑や田んぼに水を送っています。

上田地域は、雨が少ない場所なので、むかしは水がなくて作物がよく育たない「ひでり（干ばつ）」に困っていました。

そこで、畑や田んぼに安定して水を送るために、水をためる「菅平ダム」が 1968年に作られました。その後、1975年にこの大きな水路が作られました。

水路の長さは 15.8 km！ ほとんどが山の地面の下に作ったトンネルやパイプを通って、水を山の向こうまで運びます。

この水路のおかげで、ブドウやリンゴなどの果物がたくさん育つようになりました。

パイプやトンネルを作った時の写真

左岸幹線水路の、通水記念式

とくに東御市ではシャインマスカットやワイン用のブドウもたくさん作られていて、とても有名になっています。

水路はとても大切なものですが、古くなると水がもれてしまうことがあるので、平成になってから２回も大きな工事で、直したりじょうぶにしたりしました。

神川の水が使われる東御市御堂地区のブドウ畑

東御市・上田市で盛んなワイン用ブドウの栽培

左岸幹線水路の管理とおしごとのおはなし

左岸幹線水路は、地面の下にある水路なので、こわれた場所はすぐに直さないといけません。まだ直していないところも、これからしっかり調べて、大切な水路を長く使えるように工事をしていく予定です。

この水路の管理をしているのは「左岸水路運営協議会」というグループです。このグループには、左岸の水を使ういろいろな地域の代表の人たちが入っています。

例えば和水利組合や、上の山、深井、二号幹線、中吉田、本原、東田沢、祢津、殿城南部、御堂などといった地区の人たちです。

この人たちは協力して、次のような大事なしごとをしています。

- **水を引く**（4月1日）
- **水を流すとびら（水門）を開けたり閉めたりする**（4月4日～10月28日まで、3日ごと）
- **草を刈る**（5月28日・8月11日）
- **水を止める**（10月31日）

水門の開け閉め作業

台風などで川底にたまった土砂を取り除く作業

草刈りなど地道な作業によって整備されています。

地域の人たちが力を合わせて水を守っていること、すごいよね！

代表的な堰の紹介

ここからは神川にある15の堰の中でも、歴史のある代表的な堰を紹介するよ！

① 中島堰　② 窪・小西堰
③ 吉田堰　④ 堀越堰　⑤ 新屋堰

① 一番上の堰、中島堰

中島堰はむかし、神川の左岸で一番上にあった堰で、およそ1.4ヘクタールの田んぼに水を送っていました。

左岸幹線水路ができたとき、中島堰の水を取り入れる場所（取水口）も、その水路のスタート地点（頭首工）にいっしょに作られることになりました。

2つの堰の水を同じ場所から取り入れるため、1972年にみんなではなし合って決まり（協定）をつくり、いまでもその決まりにそって水を使っています。

左岸幹線水路の頭首工です。
中島堰はここから水を取り入れています。

② 窪・小西堰

窪・小西堰は、真田地域にある堰で、1967年からは上田市の水道水としても使われています。

堰の近くにある岩「剣岩」の下には、白山権現という神様がまつられていて、この神様は、堰を見守る神様、そして女性や子どもを守る神様とも言われています。

大切にまつられている白山権現

むかしはたくさんの人がお参りに来ていて、毎年5月17日にはお祭りも行われていました。

堰の少し下の川の底は、緑色の岩（緑色凝灰岩）でできていて、春の新芽や秋の紅葉といっしょに見ると、とてもきれいです。

神川の中でもとくに景色が美しい場所のひとつなんですよ！

自然と歴史のある場所ってすてきですね～！

③ 吉田堰

吉田堰は15ある堰の中でも、たくさんの田んぼに水を送る大切な堰です。

地元の人たちは「よしだせんげ」と呼んでいて、吉田堰管理組合というグループが管理をしています。

現在では新しく立派な頭首工があります。

吉田堰は、717～723年ごろに作られたといわれているとても歴史のある堰で、むかしは「養老堰」とか「永禄堰」とも呼ばれていました。

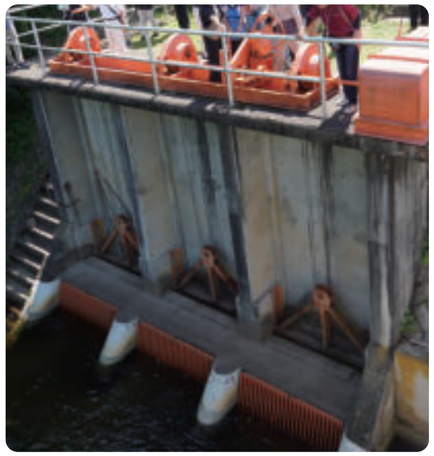
水は、真田地域の石舟というところからはじまる長さ17kmの水路で、様々な地域を通り、千曲川にまでつながっています。

むかしは600町歩（595ヘクタール）もの広い田んぼに水を送っていたけれど、いまでは約280ヘクタールに減ってしまいました。

長い歴史の中には水を巡って、
むずかしい問題もあったんだよ

つづく▼

頭首工の裏側、矢印の方に取水口があって、そこから水を取り入れます。



これが取水口です。上部のハンドルを回して、ゲートを開けて川の水を取り入れます。

水を巡る地域の問題

たとえば、ある地域の人たちだけが、堰の掃除や、修理をするための費用を出していた時期もありました。

それを見直そうと、2015年に「みんなで平等に協力しよう！」というはなし合いがはじまりました。しかし、一部の地域では「いますぐには協力できない」という人たちもいて、そのはなし合いはいったんなくなってしまいました。

川の水を取り入れる量や時期は決まっていて、取水口の近くには標識が立てられています。

これからの吉田堰

吉田堰は、約1,000人もの農家の人たちが使っていて、農業にはとても大事な水路です。だから、みんなで協力して、長く使い続けられるようにすることが大切です。そのため、頭首工などの施設を自動化や電動化して、管理がしやすくなるように改良しようという動きもあります。

でも、最近は農家や田んぼが少なくなってきて、この先の農業がちょっと心配とも言われています。

また、ダムや水路がどうやって管理されているか知っている人も少なくなってきたので、むかしの人のがんばりや歴史を、次の世代に伝えていくことも大切だと考えられています。

一般の人や子どもにもダムや堰の大切さを知ってもらう夏休み水の勉強会

むかしの人たちが作り、いまも守り続けている吉田堰
これからも大切にしていきたいですね

④ 堀越堰

堀越堰は、神科地域から塩尻地区にかけて広く田んぼや畑に水を送っている堰で、砥石城跡の下のがけのところから水を引いています。

山をくりぬいて水を通す「隧道」というトンネル工事が行われ、水は神科地域の北部の伊勢山へ流れていきます。

堀越堰は水の流れがとても速いので、その強い力（水力）を使って、むかしは40台もの水車がありました！

むかしは上田にも水車が
たくさんあったんだよ！

水車は、お米を精米したり、粉にしたりするのに使われていて、なんと群馬県のお米まで引き受けていた人もいたそうです！

しかし、1960年代後半には電気を使う工場がふえてきて、水車はだんだん使われなくなりました。伊勢山には、当時の水車小屋が1つだけ残っていて、むかしの様子を知ることができます。

いまも残る水車の一部（伊勢山）

堰の水でプールや工場も!

堀越堰の水は、神科小学校にも使われて、1934年には、とても大きなプール(長さ35m!)が作られました。

その近くでは、水車や水の力で動く発電機が使われていて、お米や麦の加工をしたり、しょうゆを絞ったり、炭づくりや縄づくり、大きなドリルを使う工場まで動かしたりしていたんです!

堀越堰の水を使ったむかしの神科小プール

いまも残る火薬水車跡

神科のホームスパンと堀越堰

むかし、神科地域では「ホームスパン」というヒツジの毛をつかって、ネクタイやストール(肩掛け)などを作るしごとがありました。

ここでも神川の水力を使った機械で、ヒツジの毛から糸を紡いでいました。1952年には、376の家でヒツジが715頭もいたと記録が残っていることからとても盛んだったことがわかります。

神科で作られたホームスパンの品物は、なんと東京のデパートで売られたり、宮さま(皇族)がお召しになったりしたほど、すばらしいものでした!

しかし、そのあと化学せんい(ナイロンやポリエステルなど)が広まって、ホームスパンのしごとは1960年代にはなくなってしまいました。

昔の人は水の力を工夫して、色々なしごとをしていたんですね!

堀越堰の水はすごかった!

堀越堰の水は、田んぼや畑に水を送るだけでなく、神科地域の学校やしごとにも大きな力をあたえてくれました。この水は塩尻地区を通って、おとなりの坂城町まで流れています。

標高の高い山の方へ流れているよ!
水の力ってすごい…!

➡ 標高の高い方へ逆らって流れる八幡秋和堰　➡ 低い方へ流れる排水路

神川と発電のおはなし

堀越堰の取水口の少し上に位置する畑山では、そのむかし神川の水を利用した水力発電所がありました。

1902年8月11日、この畑山発電所の電気を使い、東信地方で初めてとなる、電灯の灯りが点きました。当時は画期的な出来事で、電灯の珍しさに見物人が集まったそうです。

1945年の洪水がきっかけで、1966年には廃止となってしまいましたが、施設のあとは1982年に上田市の指定史跡として残され、いまでも見に行くことができます。

当時の発電機

水を発電機に落とす導水管

ロマンですにゃ!

⑤ 新屋堰と神川に落ちる大きな滝

新屋堰は、次のような目的に使われている水の通り道です。

- **農業（田んぼや畑の水）**
- **火事のときに使う水（防火用水）**
- **上田市の水道の水**

とても水量が豊かな新屋堰

このような目的に使われるため、1年中たくさんの水が流れています。

新屋堰の水の一部は、新屋の集落のなかでわかれて、また神川に戻されます。

そのとき、なんと高さ約30mの崖から流れ落ち、とても立派な滝になっています。

これからは、この水の力を使って、小さな発電（小水力発電）もできるかもしれないと考えられています。

神川に流れ落ちる滝

神科台地と堰のおはなし

神科の台地を東御市の方面の上空から見たところ

神科台地ってどんなところ?

神科台地は、川よりも高い場所にある土地（河岸段丘）になっています。

川が少なく、井戸もほとんど作れないので、水がとてもたりない場所なんです。だから、堰を作って神川の水を引いてくることが、この土地に住む人にとって、とても大切でした。

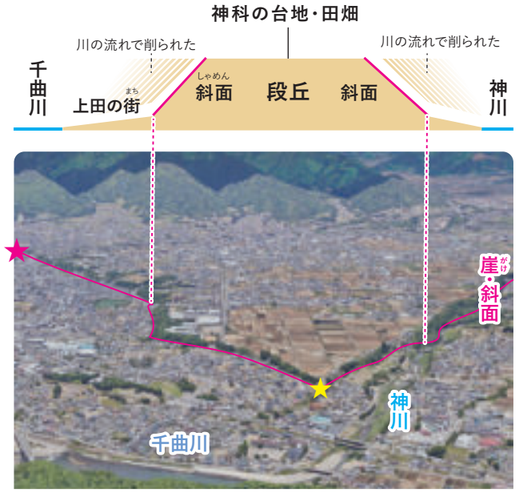
河岸段丘ってなに?

川の流れが長い時間のあいだに土地を削って、広い平らな場所をつくります。

そのあと川の水がもっと下のほうを削ると、前にできた平らな場所が川より高いところにのこります。

こうして、川のよこに「段差（だんだんの土地）」ができたものを河岸段丘といいます。

神科の台地は、神川と千曲川の流れで削られて、残ったのがわかるね! まるでハートの様な形でステキ!



（左）神科の台地を上から見たところ（右）神科の台地を斜めから見たところ

高い台地に水を運ぶための工夫

神科の崖はとても急ですが、堰はそれを乗りこえて台地まで水を引いています。

上流側から「堀越堰」

▼

真ん中に「新屋堰」

（新屋堰から分水する二区堰と呼ばれる堰もかつて神川から取水していました）

▼

下に「岩門堰」

というふうに、この台地にはいくつかの堰があり、見ごたえのある風景です！

台地の中もまっすぐ・きれいに田んぼが並ぶように計画的に区切られていて、各堰がそれぞれのエリアに水を送っています。

その計画をした図面が右上の図です。まるで血管のように細かく、隅々まで水が行き渡るよう、整備されているのがわかります。

1949年以前の水路図（一部加工）

美しく並ぶ岩門地区の田んぼ

むかしの水争い

むかしは水がたりないときは、みんなが少しでも水を使いたくてけんかになることもありました。

夜にこっそり自分の田んぼだけに水を引いたりする人がいたため、あぜ道にふとんを持ちこみ、寝ながら水を守ったというはなしもあります。

1914年には、神科の2つの村の間で水の取り合いの大きなトラブルが起きましたが、村の人たちのはなし合いで、うまく解決されました。

ふとんを持ってきて、水路のそばで寝ながら水を守っています。（昭和のはじめ）

あまった水を流すための工夫

夏は水がたりなくなる一方で、大雨で水があふれることもありました。

笹井では、雨がたくさん降ったときに村に水があふれないようにする排水路（あまった水をながす水路）を作りました。

この排水路はいまでも使われています。

神科台地の人たちは、
水が少ない土地でも工夫してくらしてきたんですね！
川や水、そして堰のありがたさがよくわかります

3. 神川の水と菅平ダムのおはなし

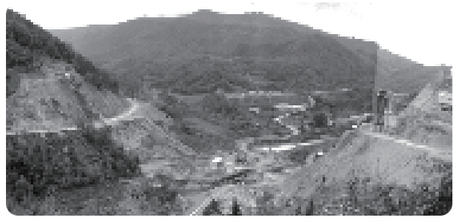
菅平にダムを作ろうとした理由

むかし、神川の水を使っていた田んぼでは、水がたりなくて困っていました。

とくに1948-49年は2年つづけて雨がふらない「ひでり」があり、お米があまりとれませんでした。

そこで、農業をしている人たちは、菅平の山の間に、水をためる「ダム」を作ろうと考えました。

菅平ダムができる前の貴重な写真です。



この山と山の間を削って、水をためることを考えました。

四阿山で硫黄採掘事件

そのころ神川では大きな事件が起きました。東京の会社が神川の水源である四阿山で「硫黄」という鉱物を掘ろうとしていました。もし硫黄をたくさん掘ると、神川の水が汚れてしまい、魚は住めなくなり、田んぼや水道にも使えなくなってしまうことがわかりました。

そこで、地元の人たちは協力して反対運動をし、ついに1953年に硫黄を掘るのをやめさせて、神川のきれいな水を守りました。

いまも残る硫黄の採掘現場あと

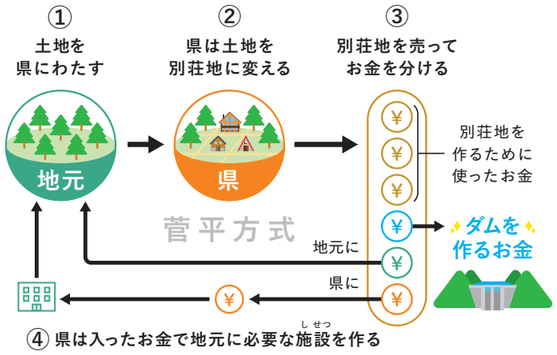
地元の人が一致団結して、神川を守ったんだね

菅平ダムができるまでのおはなし

硫黄の問題がなくなったあと、もう一度ダムを作ろうという動きが起こりました。

しかし、農業のためだけにダムを作るには、お金がかかりすぎて、むずかしかったのです。そこで「農業」「水道」「発電」の3つの役目(多目的)に使えるダムにすることにしてお金を集めました。

それでもまだ、たくさんのお金がたりなかったので、菅平の山の土地を別荘地として売って、そのお金でダムを作ることができるようになりました。これを「菅平方式」といいます。こうして、1968年に「菅平ダム」が完成しました。



もし菅平ダムがなかったらどうなっちゃう?

最近は「ゲリラ豪雨」や「線状降水帯」など、これまでにないくらい強い雨が降るようになりました。地球温暖化のせいで、大雨がふりつづいたり、逆に雨がまったくふらずに干ばつが起きることもあります。もし菅平ダムがなかったら・・・

- **大雨や台風で川があふれて、大洪水になるかもしれません**
- **長いあいだ雨が降らないと、田んぼがひびわれて、お米がとれなくなるかもしれません**

菅平ダムは、洪水をふせいだり、田んぼや人が使う水を安定してあたえて、私たちのくらしと命を守っているのです。

菅平ダムの大切さを知ってもらう勉強会

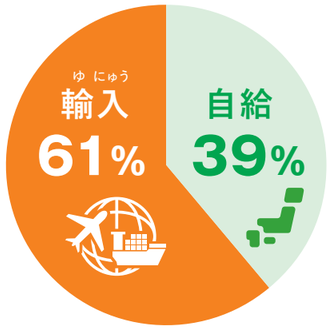
4. 神川流域の課題と、今後の展望

神川が流れる地域で問題になっていることはなんだろう？
これからどうしていけば良いのかな？ 一緒に考えよう！

日本の農業と神川流域のこれからのおはなし

日本は外国からたくさんの食べものを買っている国です。自分たちで生産する、食べものの量（食料自給率）はとても低くなっています。

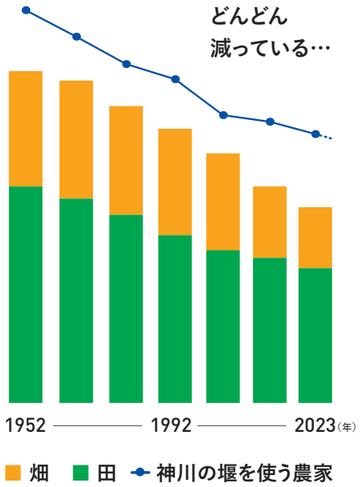
だからこそ、農業は私たちのくらしを守る大切なしごとで、これからもずっと続けていくことが大事なんです。



神川の流域ではどんな問題があるの？

神川のまわりでは、小さな農家（家族でやっている農家）が多くて、いまは次のような問題がたくさんあり、このままだと、何年か先に農業がなくなってしまうかもしれないと心配されています。

- 農家の人が年をとって、やめてしまう人がふえている
- 空き家や、使われない畑がふえている
- 田んぼや山が荒れてきている
- イノシシやシカなどの動物に作物を食べられてしまう



田畑や農家が減ってしまうと、神川の水を使う人や、堰を整備する人手もどんどん減ってしまうよね。
農業を元気にするにはどうしたらいいのかな？

＼き、きをつけますッ…！／

いま、国では「たくさんの田んぼをひとつにまとめて、大きくしてむだを減らして、うまく農業をしよう」としています。でも、わたしたちが住む長野県は神川流域のように山が近く、田んぼがバラバラにある場所が多くむずかしいのです。

だからこそ、いまでもがんばっている小さな農家のみなさんがとても大切です。その人たちは、水の管理をしたり、作物を育てたり、自然を守ったりしています。

農業を守るためにこれから大切なこと

これからの農業には次のことがとても大切になります。

- **農業が「やってみたい！」と思える、楽しいしごとになること**
- **若い人や、定年になったあとに農業を始める人がふえること**
- **農業でちゃんと生活できるように、しっかりお金をかせげるようにすること**

この本で伝えたいこと

※順不同

- 神川と地域のつながり
- 水を有効に使う「堰」のはたらき
- それぞれの「堰」の特徴
- 菅平ダムの大切さ
- 昔から守られてきた神川の水
- これからも守っていく神川の水
- 川はいつもキレイに！
- 上田市・東御市の農業と食を守る

わたしたちの住む上田市・東御市は神川の恵みをいただいています。
おともだちやお家の人とも神川についてはなしてみよう！